



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3790 号 2017.7.24 発行

社説 相模原事件から1年 命の重さを改めて考える 毎日新聞 2017年7月24日

あの事件からもう1年になる。

相模原市の障害者入所施設「津久井やまゆり園」で19人の重度障害者が元職員に殺害されたのは昨年7月26日の未明だった。

植松聖被告（27）の初公判はまだ開かれていない。「障害者には生きる価値がない」という理不尽な動機がどのように形成されたのか、事件の核心部分はまだよくわからない。

同園で暮らしていた障害者は現在、横浜市内にある施設などで仮住まいをしている。悲惨な事件の記憶に今も苦しむ人は多いという。

神奈川県は当初、家族会などの要望を受けて施設の全面再建を打ち出した。しかし、山あいの大規模施設で再び障害者を収容することに対して各地の障害者らから批判が高まり、軌道修正をすることになった。

障害者の意思を中心に

現在、県は4年後をめどに相模原市と横浜市に小規模の入所施設を新設する方針を示している。小規模で家庭的なグループホームもつくり、選択肢を広げるといふ。時間をかけて障害者の意向を確認し、どこで暮らすかを決めるというのだ。

家族会からの反対論も根強いが、障害者自身の意思を中心に考えるのは当然である。重度の障害者についても本人の意思決定を大事にしようというのは国際的な潮流であり、厚生労働省は意思決定支援のためのガイドラインを策定している。

大規模入所施設は各地にあり、高齢で重度の障害者が多数暮らしている。地域生活への移行については、やはり家族の反対が強いこともあり、容易には実現していない。

神奈川県は福祉や心理職、弁護士など多分野の職員がチームで同園の障害者の意思確認に当たるといふ。今後の日本の障害者福祉のモデルとなるよう期待したい。

再発防止策は混迷している。

厚労省は再発防止のために精神保健福祉法改正案を今年の通常国会に出したが、精神障害の関係者から反対論が強まったこともあり、継続審議となった。

植松被告は措置入院から退院した4カ月後に事件を起こした。このため、自治体や保健所による退院後の相談支援、自治体間の患者に関する情報伝達の強化などが改正案に盛り込まれた。

ただ、障害者の地域生活を支援する福祉サービスは不足している。そちらには手を付けず、退院後の患者情報の伝達や相談ばかり強化するのは「監視」を強めるに等しいとの批判が寄せられているのだ。

また、植松被告は精神鑑定で刑事責任能力のある自己愛性パーソナリティ障害と診断された。現在の精神科医療では治療が難しいとされ、再発防止について精神科医療の枠内で検討すること自体の適否についても議論が起きている。残された重要課題だ。

個性認め合う多様性を

事件後、厚労省が防犯カメラによる監視や施設などを強化するための補助金を出した。しかし、植松被告は通り魔などではなく、同園で3年以上働いていた元職員だ。勤務中に

障害者への暴言や虐待行為があったことも確認されている。ハード面だけでなく、職員教育や虐待防止研修などをもっと重視すべきだ。

障害者を差別視する意見は今もネットなどで散見される。社会的格差が広がり、自己責任が過度に求められる中で、障害者にゆがんだ視線を向ける人は多いのかもしれない。

ただ、どんな人にも生きる権利はあり、重度障害者もそれは同じだ。肉親や周囲の人々を通して社会に何かしらの影響力を発してもいる。障害のある子からさまざまな刺激や影響を受けて偉大な功績を残した芸術家や経済人は少なくない。

被告の主張は優生思想に影響を受けたものだと指摘される。しかし、優生思想の基となったダーウィンの進化論は、優れたものや強いものが生き残ることを示す考え方ではない。たまたまその時代の環境に適したものが生き残るに過ぎないという自然の摂理を示したものだ。

地球環境や資源の有限性に直面し、未開拓のフロンティアが消失した世界で私たちは生きている。他者の存在を認めない偏狭な考えこそ、現代の環境に適していないと言うべきではないだろうか。

互いの価値観や個性を認め合い、支え合いながら共存しなければ、社会の維持や発展は望めない。あの痛ましい事件はそのことを私たちに訴え続けている。

相模原事件1年、神戸でデモ 「障害があっても」 神戸新聞 2017年7月24日



障害者や支援者ら約160人が「やまゆり園の事件を忘れないで」と商店街をデモ行進した＝神戸市中央区

障害者や支援者ら約160人が「やまゆり園の事件を忘れないで」と商店街をデモ行進した＝神戸市中央区
相模原市の障害者施設



設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害された事件から1年になるのを前に、兵庫県内外の障害者や支援者ら約160人が23日、神戸市内で追悼のデモ行進を行った。「地域で暮らしたい」「障害者は不幸じゃない」と声を上げ、障害者が地域で自由に生きられるような社会を求めた。

やまゆり園のような入所施設は現在、全国に約2600カ所あり、約13万人が暮らす。兵庫県内には昨年度時点で知的、身体障害者の入所施設が109施設あり、定員は約5600人となっている。

障害者を隔離せずに社会参加を目指す国際的な流れを受け、厚生労働省は昨年11月、本年度からの4年間で約1万1千人が地域生活に移るという数値目標を立てた。だが高齢化や障害の重度化が進み、実現は容易ではない。

デモ行進は「リメンバー7・26 神戸アクション」が主催。呼び掛け人の一人で双極性障害の吉田明彦さん(55)＝神戸市兵庫区＝が「事件の前も後も、障害者は差別され、排除され、殺され続けている。当たり前権利を勝ち取るまで戦う」と主張。元町から三宮までの商店街を約1時間かけて歩いた。

車いすやつえを使う人や呼吸器を付けた人、健常者らが腕に喪章を着け「障害があっても生まれたい」「(事件で犠牲になった)19人の名前を出せ」などのプラカードを掲げた。

デモの最後、知的障害のある芝田鈴さん(49)＝同市中央区＝は「私と同じハンディのある人たちが理由もなく殺されてしまった悲しい事件。私たちは一人の人間。私たちの

声を聞いてほしい」と訴えた。次回は神戸・三宮で8月20日午後4時から。(金 慶順)

相模原事件で当時26歳の娘を殺害された母 本紙に手紙 東京新聞 2017年7月24日
亡くなった女性の母親が本紙に寄せた手紙と、保育園に寄贈した遺品のピアノ＝22日、神奈川県内で



二十六日で発生から一年となる相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件で、娘＝当時（26）＝を殺害された神奈川県内の母親が本紙に手紙を寄せ、誕生日の思い出や現在の心境を明かした。「さびしい思いでいっぱい」と無念さをにじませつつ、植松聖（さとし）被告（27）に対しては「絶対に許せない」と痛切な思いをぶつけた。（井上靖史）

棺（ひつぎ）の中の表情は、幼少期と変わらず、色白で穏やかだった。しかし首元には、刃物で刺された痛々しい傷があった。約一年前の葬儀。母親が「これからも、娘と仲良くしてくれたことを忘れずにいてほしい」と気丈にあいさつすると、参列者らからすすり泣きが漏れた。

五年前の娘の誕生日が、今も強く記憶に残っている。母親は「喜ぶ姿を思い浮かべ」て、人気アニメ「アンパンマン」のテーマ曲などが流れる長さ約三十センチのおもちゃの電動式ピアノを、やまゆり園に入所していた娘に贈った。

職員が手渡すと、早く中身を見たがり、電池を催促した。いろいろな音を出して楽しんだ。娘が職員の助けを借りて書いたお礼の手紙には「私は元気です ままも元気でね！！」と書いてあった。「楽しんでもらえて、よかった」。母親はうれしさとともに実感した。「いつの間にか、お姉さんになったね」

だが、突然の事件でピアノは遺品になった。そのまま家に置いておくより、楽しい思い出の場所で使ってもらおうと、娘がかつて通った神奈川県内の保育園に昨年秋に譲った。

保育園は、障害の有無にかかわらず希望者はだれでも受け入れるのが教育方針だった。娘は、宮崎駿さんのアニメ「となりのトトロ」などの音楽が大好き。他の園児と一緒に砂遊びや水遊びを楽しみ、絵のコンクールにも入賞した。卒園後も保育園の行事に参加するなど、交流を続けた。

「ピアノは大切に使っていきたい」。こう話す園長（70）は、来月行われる卒園生の同窓会でピアノとともに母親と娘のことを紹介し、語り継いでいくという。

「みんなにささえられて育ってきました」。母親は、手紙で二十六年の生涯を振り返りつつ、娘の成長を見守れなくなった無念さも語った。「もう（プレゼントを）送る事もなくなってしまい、さびしい思いでいっぱいです」

そして、植松被告に対しては園長を介してこう言った。「いらぬ命はない。障害者が嫌でも、決して傷つけたり殺したりしてはならない。許せない。絶対に」

◆手紙全文

今から5年前、娘の喜ぶ姿を思いうかべて
お誕生日の日にメッセージカードをそえて
いろんな音の出るアンパンマンのピアノを送りました。
やまゆり園のスタッフさんが渡して下さり
早く中身が見たくて電池をさいそくし
いろんな音を出していたと聞いています
お便りにはステキなプレゼントをありがとう。
私は元気です ままも元気でね！！と書いて下さり
楽しんでもらえて、よかった！

でももう家に置いておくより、保育園で使ってもらった方が
きっと娘も喜ぶと思い、使ってもらう事にしました。
みんなにささえられて育ってきました
いつの間にか、お姉さんになったね
もう送る事もなくなってしまい、さびしい思いでいっぱいです
(原文まま)

「やっとたどり着いた」やまゆり園建て替えて揺れる家族 飯塚直人、岩堀滋
朝日新聞 2017年7月24日



おにぎり
をほおば
る尾野一
矢さん(中
央)を見守
る父剛志
さん(右)
と母チキ
子さん＝

横浜市港南区、飯塚直人撮影

首筋に、刃物を突き立てられた傷が残る。
「痛い、痛い」。尾野一矢さん(44)は最近、
思い出したように口にするといい。母のチキ子
さん(75)は「事件前のような笑顔はなくなった」
と話す。走り回ったり、騒いだりすることもな
くなったという。

一矢さんには知的障害があり、障害者施設「津
久井やまゆり園」(相模原市緑区)で約20年
にわたって暮らしてきた。昨年7月26日、入所者
19人が殺害され、施設職員を含む27人が負傷
した事件で植松聖(さとし)被告(27)に襲わ
れたが、一命をとりとめた。



差別・障害「私は伝えていきたい」やまゆり園事件1年 中井なつみ、編集委員・清川卓
史 朝日新聞 2017年7月24日
「ぬーたんがとぶ日」の読み聞かせに聴き入る子どもたち＝
京都府舞鶴市



障害者施設「津久井やまゆり園」(相模原市)で1
9人の入所者の命が奪われた事件から、まもなく1
年を迎える。事件とどう向き合い、その教訓をど
のように伝えていくのか。模索している人たちを訪ね
た。

京都府舞鶴市の朝来幼稚園では、「ぬーたんがとぶ
日」という絵本を教材に使っている。7月上旬、年
長組の教室で、担任の藤本友美さん(39)が読み聞かせをした。

主人公の「ぬーたん」は、京都府の鳥にも指定されているオオミズナギドリ。翼が大きくて地面から飛び立てないため、一度高い場所に登ってから飛ぶ。飛ぶことが苦手な「ぬーたん」が、少年の後押しを受けて大空へ羽ばたいていく物語だ。

障害者と高齢者が交流 大田原・蜂巢地区でお楽しみ会 下野新聞 2017年7月24日



フロアカーリングを楽しむ参加者たち

【大田原】蜂巢地区の住民グループ「わらぼっち・多賀」（新江侃（あらえつよし）会長）は23日、蜂巢の旧蜂巢小体育館で障害者就労支援カフェ「ヒカリノカフェ蜂巢小珈琲（こーひー）店」の利用者らを招いてお楽しみ会を行った。

地域の高齢者の元気づくりなどを目的に活動する同グループは、毎週同校の校庭を利用してグラウンドゴルフを行っている。同カフェに日頃の御礼がし

たいと、交流会を企画した。

参加者約30人が集まり、輪投げやフロアカーリングなどのレクリエーションを楽しんだ。終始和やかな雰囲気、得点が入ると会場からは拍手が起こった。

知的障害者がネット放送局 日本初、自ら出演・制作 産経新聞 2017年7月24日



障害福祉事業所の一角に設けたスタジオで番組を収録する「パンジーメディア」の知的障害者ら＝大阪府東大阪市（未来氏撮影）

出演者も制作スタッフも知的障害者という「日本初」のインターネット放送局が開設された。知的障害者は話をするのが苦手な人が多く、意見が表に出ることは少なかったが「私たちのことを知ってほしい」と声を上げている。相模原市の入所施設で19人が殺害された事件から26日で1年。地元でも、知的障害者のグループが新

たな活動に取り組んでいる。

◆ドラマ制作

入所施設でプラスチック部品の組み立て作業をする障害者たち。一人が「もうできないよ」と訴えると、職員にトイレに閉じ込められる。

ネット放送局「パンジーメディア」（大阪府東大阪市）が制作したドラマの一場面だ。

この番組は、東大阪市で地域生活を送る障害者たちが、利用する通所事業所の支援を受け、昨年9月から月1回、放送している。毎回約50分で、ニュースやドキュメンタリーのほか、当事者が自分の生き立ちを語る「私の歴史」のコーナーなどがある。キャスターやコメンテーターも当事者。毎回十数人が企画や撮影に加わる。

原点は、16年前に事業所の利用者と職員で訪れたスウェーデンだ。当事者が情報誌やラジオ番組をつくる活動を視察し、「いつか自分たちも」と夢を温めてきた。

◆普段から積極的に

知人の映像制作会社社長の協力を得て、昨年2月から準備を開始。入所施設での虐待を描くドラマの稽古をしていたさなかの昨年7月、相模原事件が起きた。ドラマには、事件を受けて、みんなで話し合っただけ追加したせりふが2つある。「好きで障害者になったんじゃないや」「私ら生きてたらあかんのか」

脳性まひがあるプロデューサーの梅原義教さん（42）は「報道で取り上げられるのは保護者や支援者の意見が多くて、当事者の声あまり出てきていない」と訴える。今月下旬に放送の回では、改めて事件のことを取り上げる予定だ。

事業所を運営する社会福祉法人「創思苑」の林淑美理事長（67）は、利用者の変化に驚いた。引っ込み思案や恥ずかしがり屋だった人たちが番組出演をきっかけに、それまで閉じ込めていた思いを解放するかのようになり、普段から積極的に話すようになった。「『そんなことを考えていたのか』と、職員側にも気づきがあった」

◆地元では交流会

相模原事件の地元、神奈川県でも動きがある。知的障害がある横浜市の奈良崎真弓さん（39）は、十数年前から当事者同士の勉強会や交流会をしているが、事件を受け仲間と「にじいろでGO!」という新しいグループを結成。

奈良崎さんは「みんな話したいと思っているけど、アピールする場がなかった。本人同士だからこそ話せることもある。私たちが笑ったり怒ったりするのを知ってもらうことで、差別もなくなるのではないか」と話している。

■「本人の時代」が到来

知的障害者らの意思決定支援に詳しい上智大の大塚晃教授の話「これまでも障害者団体や先進的な入所施設で、知的障害の本人たちによる活動は行われてきたが、実際には職員や親など周囲の人間が多くのかんがえてしまいがちだった。本当の意味で当事者の意見に耳を傾ける取り組みは意義のあることだ。大事なことは、一定の方向に誘導するのではなく、彼らが自由に意見を言えるようにする支援者の姿勢だ。相模原の事件はむしろ『本人の時代』到来の契機とすべきだろう」

自閉症男性、画家として就職 個展で企業PR
重度の自閉症で、画家として民間企業に採用された大西達也さん。自宅で絵画制作に励んでいる＝岐阜市北一色

岐阜新聞 2017年07月24日



形象派美術協会岐阜支部に所属し、重度の自閉症がある大西達也さん（20）＝岐阜市北一色＝が今月から、愛知県の企業で在宅勤務の画家として働き始めた。厚生労働省愛知労働局が仲介し、芸術分野で障害者の雇用を促す取り組みの一環で、県外者が採用されたのは初めて。母陽子さん（47）は「創作活動と仕事を両立することができる。絵を描くことが好きな自閉症の子や親の励みになれば」と喜ぶ。

大西さんが昨年、全国花火大会のために制作したモザイクアート。長良川や金華山を背景に打ち上がる花火を表現した

画家として障害者を雇用するのは大西さんが同局で7人目。陽子さんは知人を通して、自閉症の男性が画家として雇用された事例を知り、昨年12月に同労働局に相談。呉服販売の専門店チェーンを展開する「ほていや」（名古屋市中区）でのパート採用が決まった。

職種は在宅勤務の広報係。個展を開催する際に同社の所属だと示し、企業PRをする。自宅での制作活動を労働時間に換算し、週20時間働く。業務報告に応じて賃金が支給されるという。

大西さんは、14歳のときにアイロンビーズやガラスのモザイクアートを作り始め、アクリル画にも取り組んでいる。平日は岐阜市の就労継続支援B型事業所に通い、帰宅後は自宅で絵を描く。5、6時間はキャンバスに向かい、動物などから着想を得た抽象画に、黙々と筆を走らせる。四つ切りサイズの作品を月に3、4枚は仕上げるという。

特別支援学校高等部に在籍中、複数の企業で実習を受けたが他者と意思疎通を図ることが難しく、採用に至らなかった。B型事業所は楽しく通っているものの、賃金は低い。絵の具やモザイクガラス、キャンバス代などの出費は年間20万～30万円に上り、「絵を諦

めなければと思っていたが、今後は存分に描いてもらえる」と陽子さんは胸をなで下ろす。
本来就職するまでの通所が一般的なB型事業所だが、障害福祉サービスの支給決定をする岐阜市に相談、画家としての労働は短時間で、大西さんが事業所の環境に慣れ、情緒が安定していることから、就職後も通所することが認められた。

昨年は全国公募展「第64回形象派展」で新人賞を受賞。同年夏には岐阜市の長良川で開催された全国花火大会（岐阜新聞・ぎふチャン主催）のためにモザイクアートを制作し本紙で掲載され、活躍の場は広がっている。

大西さんの契約は1年ごとの更新だが、ほていやの担当者は「基本は長期でと考えている。良い作品を作ってほしい」と期待している。

障害者・市民の夏まつり 地域と交流 家族連れでにぎわう 和歌山 /和歌山



毎日新聞 2017年7月23日
大勢の人でにぎわった夏祭り＝和歌山市の和歌山城西の丸広場で、石川裕士撮影

障害者と地域住民の交流を深める恒例の「障害者・市民の夏まつり」が22日、和歌山市の和歌山城西の丸広場であった。福祉作業所などによる出店やステージイベントがあり、家族連れらでにぎわった。

障害の有無に関わらず気軽に参加できる夏祭りを開催しようと、福祉や医療関係団体などで作る実行委が主催。

群馬) 障害者スポーツ70人体験 パラリンピックに向け 朝日新聞 2017年7月24日 車いすバスケットボールを体験する参加者＝吉岡町南下



東京パラリンピックに向けて障害者スポーツの機運を高めようと、体験会が23日、吉岡町南下の吉岡中学校であった。障害者と健常者計約70人が汗を流し、競技や障害への理解を深めた。

県障害者スポーツ協会などが初めて企画した。協会によると、県内では東京などの首都圏と比べ、障害者スポーツの認知度が低く、競技者を発掘したり、競技への「応援団」を

増やしたりするのが狙い。年内に川場村や、館林、高崎の両市でも開く予定という。

参加者は三つの班に分かれて、車いすバスケットボール、ゴールボール、ボッチャを体験。それぞれの競技者からルールやコツを教わりながら楽しんだ。

ケアマネジャーの仕事で車いすを扱うこともある吉岡町の瀧上奈美さん（42）は「競技用の車いすに乗ったのは初めて。腕の筋力を思ったよりも使い、翌日には筋肉痛になってしまいそう」。吉岡中3年の磯香梨さん（15）は「車いすのコントロールをしながらボールを使う複雑な動きが難しかった。障害者スポーツってすごい、と思った」と話した。

パラ陸上世界選手権 女子800mで古屋が銀 アジア記録更新

NHK ニュース 2017年7月24日

ロンドンで行われているパラ陸上の世界選手権は23日、大会最終日に女子800メートル知的障害のクラスの決勝が行われ、22歳の古屋杏樹選手が、自身が持つアジア記録を更新し、銀メダルを獲得しました。

パラ陸上の世界選手権は23日、大会最終日に女子800メートル、知的障害のクラスの決勝が行われ、古屋選手や19歳の山本萌恵子選手ら6人が出場しました。

古屋選手はスタートから積極的に飛ばし、先頭でレースを引っ張りました。終盤はスピードが落ちてハンガリーのベルナデット・ビアチ選手に抜かれましたが、その後も粘って2分21秒37でフィニッシュし、自身が持つアジア記録を更新して銀メダルを獲得しました。優勝は2分20秒51でフィニッシュしたハンガリーのビアチ選手でした。

古屋選手は「いい記録が出せて後半も粘れたのでとてもうれしい。金メダルが欲しかったが、次の海外の大会で取れるように頑張りたい」と話していました。



高校卒業してから本格的に陸上始める

古屋杏樹選手は埼玉県桶川市出身の22歳。高校を卒業してから本格的に陸上を始めました。知的障害のクラスで、400メートルと800メートルに出場しています。

全国障害者スポーツ大会やジャパンパラ大会など国内大会で優勝する一方、国際大会でも、ことし5月タイで行われた知的障害の選手の世界選手権、女子800メートルで2分25秒75のタイムでアジア記録を更新し、実力を伸ばしていました。

世界選手権の前にはペースを守って長距離を走るなど、週6回の練習で調整を進めてきました。

【私説・論説室から】なぜ忘れ去られたのか

東京新聞 2017年7月24日

およそ常識では考えられない痛ましい事件だ。先日、埼玉県の障害福祉サービス事業所「コスモス・アース」で、重い知的障害のある十九歳の青年が送迎用ワゴン車に約六時間も放置され、熱中症で息を引き取った。

他に四人の利用者を乗せていたが、運転手はこの青年だけを降ろし忘れたという。ふだんは出迎えて点呼を取る職員も、忙しくて手が回らなかったと聞く。驚くべき無責任ぶりだが、不可解な事態が相次いで発覚した。

昼食を用意する職員が利用者の出欠を示す黒板を見ると、青年は出席扱いになっていたという。当然、手つかずの食事が一人分残った。なのに、だれも青年の不在を気に留めなかった。事業所では一日六回、利用者の所在を確認していたというが、信じがたい。

開設は三年前の四月。この間にグループホームの経営にも乗り出している。ホームページを眺めると、大塚健司理事長は「自然環境を守り、障害者があたりまえに暮らせる地域づくり」を掲げる。利用者の日中活動に加え、みそ造りや芋煮会、コスモス祭りといった多彩な行事を催し、地元と交流してきた。

二〇一四年度に約四千三百万円だった事業活動の支出は、一六年度には約七千二百万円に上っている。事業の拡大で、理念が見失われてしまったのではないかと。健全者にとっての「あたりまえ」の押し付けが、青年の命を奪ったのかもしれない。（大西隆）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行